
境界

白鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界

【Nコード】

N0122W

【作者名】

白鳥

【あらすじ】

小さな探偵事務所に訪れた青年。持ち込んだ依頼は、一見、理解不能なものであった。生と死の境界を越えた女。それを追う青年。二人の抱える秘密を、探偵は静かに解いていく。

訪問

何故だろう。

貴方は生きている。

そして、死んでいる。

嗚呼。

貴方は、境界さかいを越えてしまったのですね。

僕も、其方へ 行けるだろうか。

白い壁。

白いカーテン。

風が、部屋を抜ける。

私が心地良い眠気に身を委ねていると、ちりん、と呼び鈴が鳴った。

「どうぞ」

私はしぶしぶ立ち上がった。

夢か現か解らない中途半端な状態から急に覚醒させられて、少し腹立たしかった。時計を見るに約束の時間であるし、それは理不尽な怒りではあったが。

ドアが緩慢ゆっくりと開き、眼鏡を掛けた猫背気味の青年が恐る恐る入ってきた。

「失礼、します。先日、電話した者です」

「お待ちしております。どうぞ、お座り下さい」

不機嫌さを微塵も出さず来客用のソファを示したが、青年はドアの前に突っ立ったまま私の部屋を眺め回していた。

「何というか……出来すぎですね」

「私の趣味でね」

白を基調として、均整のとれた一室。

全ては自分が最も落ち着くようにデザインした部屋である。

「白昼夢を見るには最高の部屋だよ」

私がそう言うと、青年は笑った。笑うと妙に妖艶な顔立ちになるな、と私はぼんやり思った。

「何となく、解る気がします」

青年は観察を続ける。

余り気持ちの良いものではない。

「とりあえず座りなさい。依頼を聞かなければならないから」

人を探して欲しい、と電話の向こうの声は言った。

詳細を語るうとする電子音を遮り、詳しい話を聞きたいので後日改めてお越しいただきたい　と面会の約束を交わしたのが三日前。正直、来るか来ないかと問われれば、八割方来ないと答えただろう。

私立探偵ほど時代錯誤な職業は無い　と自分でも思う。

子供の頃、シェアロック・ホームズにどっぷりと嵌り、教室の片隅で文庫本のページを捲りながら、「探偵」が活躍するあの世界に居る自分を、何度も夢想した。

そして。

私は、「探偵」という肩書きが無性に欲しくなった。

探偵事務所を開業し、念願叶って「探偵」の称号を手に入れたが、私の中の醒めた理性は、それが所詮道楽であることを重々承知していた。

尊敬すべきあの名探偵と違い、私には、私を頼って訪ねてくる刑事もいなければ、私を慕って調査の手伝いをしてくれる少年探偵団もない。

助手だけは、いる。

守宮麻衣。

二十歳になったばかりの才媛で、本来大学は夏休みの筈なのだが、

今は締切の近いレポートが有るらしく、大学に行っている。

とにかく、生計が成り立たなければ、すぐに辞めるつもりだったのである。

しかし、去年 開業して何ヶ月かで既に廃業寸前だった我が事務所に、思わぬ収入が舞い込んだ。

それもかなり多額の。

そのお蔭で幸か不幸か、今も道楽を続けている。

青年が電話で依頼の詳しい内容を話そうとするのを止めた理由は他にもない。「来ない」と思ったからである。

来なければ依頼を受けることは出来ない。

依頼を受けなければ報酬を得ることも出来ない。

報酬が無ければ 聞いただけ損である。

探偵と言えども商売。

それは、シヤアロツク・ホームズが教えてくれたことではなく、私の人生経験である。

ともあれ、青年は意に反して訪れた。

青年によって淡々と語られた依頼は、私には とうより常人には 理解し難いものであった。

訪問（後書き）

駄文ですが、お許し下さい。

8 / 24 助手（守宮麻衣）の説明を追加

依頼

米谷武、と青年は名乗った。

「大学二年生です。此処のことは知り合いから聞いて
知り合いというのが誰か、容易に想像できたが、敢えて口にしな
かった。」

「この人を」

探して欲しいのです　　そう言って米谷はポケットから写真を取
り出し、木製の机テーブルに置いて私の前へ滑らせた。

「失礼」

私は写真を手に取り、何秒か見つめた。
女性の写真だった。

「この写真はお預かりしても？」

「あ、いやその……」

「コピーで良いですよ」

私は軽く笑いながら写真を返した。

米谷は恥ずかしそうに、それをゆっくりとポケットに戻した。

「まず確認したいのですが、この女性と米谷君の関係は？」

「友達　だと思いません。何度か会って、色々な話をして、次の約
束をして。その繰り返しでしたがいつの間にか、僕の日常の中で唯一の楽
しみになっていました。でもある日突然、彼女は遠いところに行っ
てしまったのです」

「遠いところ？君には彼女の行先に心当たりがあるのかな？」

「いいえ。最後に会った時、彼女がそう言いました」

違和感。

「そうですか。ではもう一つ質問をしよう。彼女は自らの意志で、
君から去ったのか？」

一瞬の沈黙。青年は顔を伏せた。

「貴方とはもう会えない、そうも言われました。でもその時の彼女

の表情が僕には忘れられない。彼女は、それを望んでいなかったように思います……」

言葉が尻窄みになる。

米谷は心なしか焦っている。

「解った。その人を探すための重要な情報となる場合を除いて、君が彼女を探す理由は話さなくていい。警察じゃないからね。ただ彼女自身の情報は君の知っている限りを教えてくれないかな。依頼を受けるかどうかはそれから決めます」

「有り難う御座います。彼女の名前は」

葛原美貴。

「受けたのですか？」

白い手。

目の前の机にカップが置かれる。

「有り難う。君の淹れる紅茶が楽しみで生きている、と言っても過言じゃない」

「ご冗談を」と白い手は言う。

「ただの市販の紅茶です。誰が淹れても変わりません」

「紅茶の種類など如何でも良いんだよ、麻衣君。要は誰が淹れたか、だ」

「所長の助手ですわ」

私の助手は、私の称賛を軽く躲して台所キッチンに行き夕食の準備にとりかかるうとしている。若い女性が夕食を作ってくれるのは、男の独り身には大変有り難いのだが、食費はしっかり請求される。何時ものように紅茶の受皿には、小さく折畳まれた紙が添えられていた。近くのスーパールのレシートである。

青年は帰り、白い部屋はすっかり橙色に染まっていた。

「それで、受けたのですか？」

彼女がわざとらしく敬語を使う時は、少し怒っている。

「受けたよ。貯えにはまだ余裕があるし、面白そうでなければ断ろうとも思っただが」

紅茶を啜る。

本当に美味い。

「お言葉を返すようですが、何時までも去年の事件の報酬に頼つてたら、絶対に事務所を閉めることになるんですからね。あれは偶然たまたまです」

「解ってるよ」

それに と彼女は続ける。

「断るなんて……折角久しぶりの依頼ですよ？」

「君の斡旋のおかげさ」

リズム良く鳴っていた包丁の音が乱れた。

どうも内緒にしておきたかったらしい。

「……米谷君とは大学のゼミが一緒なんです。普段は余り話さないんだけど、私が探偵の助手をしてるって、人伝ひとつとてに聞いてたみたい。それで、紹介してくれないかって。でも何を依頼したいのか、聞いても全然教えてくれなかったわ」

「そういうことだったのか。しかし、難儀な依頼だよ」

包丁の音が止まる。

「そういえば所長、さっきからずっと手に持つてるものを見る様だけど、何ですそれ？」

「写真さ」

麻衣がエプロンで手を拭きながら寄ってきたので、私はそれを渡した。

「綺麗な人ですね」

青年の写真の複製には、若く美しい女性が写っていた。

女性は写真の枠と、もうひとつの枠の中で、笑っていた。

写真は全体的に青みがかっていて、画像が粗く暈ぼやけている。携帯で撮影したものだろう。

「所長。これって」

写真には。

葛原美貴の。

遺影が写されていた。

依頼（後書き）

次回の投稿には、かなり時間がかかると思います。

駄文ですが、お許し下さい。

仮説

夕食は応接用の机テーブルで食べるのが、習慣である。

オムライスにオニオンスープ、サラダ。

私の助手の得意料理である。

「御馳走様でした」

どれも、迎とこも美味しかった。

「何故、受けたのですか」

私が食べ終わるなり、先に食事を終え、指定席である助手専用デスクに頬杖を突いて私を睨みつけていた麻衣が突然口を開いた。

私が食べ終わるのを待っていたのだろう。

食事中もずっと依頼のことを考えていたに違いない。

「面白そうだから、と言っただらう？麻衣君、君にも手伝って貰いたい」

麻衣は急にデスクを両手で叩いて立ち上がった。

「死人を探せと言うのですか！頭がおかしいわ！」

助手は明らかに混乱し、憤っている。

「落ち着きなさい。戸惑うのも無理は無いが……探偵である以上、

私は米谷君の依頼を解決したい」

「解決も何も、最初から答えは解っているじゃないですか！彼女

美貴さんは彼岸あのよにいます。大方、米谷君は想い人に死なれて、それが信じられないんでしょう。だからといって探偵に人探しの依頼をするなんて、異常です」

「それは間違っているよ」

私は静かに反論する。

「この写真は、葛原美貴の葬式の時に撮られたものだろう。つまり、米谷君は葬式に出席している。彼女が死んでいることを知っているんだ。それに異常という言葉を経々しく口にはいけない。正常、異常を決めるのは私達の曖昧な認識に他ならないし、そういう分類カテゴリー」

で物事を捉えていては、見誤るよ」

助手はばつの悪そうな顔をして、静かに座った。良く見ると、目を潤ませていた。

「御免なさい……。軽率でした。探偵の助手失格です」

「そんなことは無い。君はこんなに美味しいオムライスを作れるんだ。探偵助手としての素質は十分有る」

下手な励ましにも関わらず、麻衣は目を潤ませながら微笑んだ。思わず目を逸らす。

「でも、米谷君は何故、このような依頼を？」

「うん。君の推理も強^{あなが}ち間違っ^あては無いと思う。彼は、葛原美貴が生きていると思っ^あてているんだ」

「死んでいると知りながら、生きていると思っ^あてている？矛盾、してませんか」

その矛盾にこそ この奇妙な依頼の鍵が有るのだろう。

「米谷君は美貴さんのことについて、どれ位知っ^あてていたんですか？」
葛原美貴。

年齢、二十三歳。

大学を卒業後、某有名大学の大学院に進学。

彼女が大学院の近くに借りた下宿が、米谷武の両親が大家をしているアパートであったことから、二人は親しくなっ^あたらしい。

「最後に会っ^あたのは二ヶ月前 六月二十六日。それ以来、彼女は米谷君の前から姿を消した」

「二ヶ月前？私が相談を受けたのは確か、丁度一週間前のことですよ。大分、間が空いていますね」

「探さないで と言われたそうだよ。二ヶ月間、誰かに相談するべきかどうか、迷っ^あてていたんだ」

麻衣は顔を顰^{しか}めた。

先程の事をまだ引きずっているらしい。

「麻衣君、君の推理も強^あち間違っ^あては無いと言っ^あただろう？彼の依頼は、人探^あしなんだ。彼女が死んでいると知っ^あていて、彼女が生き

ていると思っっている。これは奇妙だ。ここからは私の勝手な推論に過ぎないが、この矛盾を解く仮説を一つ、立てた」

一呼吸置く。麻衣も此方をじっと見つめている。

「彼は、彼女が亡くなった日より後に、彼女と会ったのではないだろうか」

私の助手は少し気が抜けたように、ふっ、と息を吐いた。

「先程の発言は撤回しますが、それでは矛盾を矛盾で説明しているようなものではないですか？」

「ふふ、君の頭の良さには常々、感心する。その通り。しかし、そこから更に幾つかの仮説が立てられることが解る。私の考えたケースは三つだ。一つ、彼女の亡くなった日は彼の思い込みで、実際は行方不明となった後に亡くなったケース。二つ、彼女が亡くなった後、彼が会ったのは、別人であるケース。三つ、遺影と葛原美貴が別人であるケース」

一つ目の場合は、単純である。何故米谷が亡くなった日を勘違いしたか、という疑問は残るが、彼の思い込みを修正してやれば、依頼は解決する。

しかし、二つ目と三つ目の場合、問題が生じる。

「第三者の存在、ですね」

「そうだ。それも、米谷君が、葛原美貴と思い込む程、彼女と良く似た人物」

「美貴さんには姉妹がいたのでしょうか」

「そう考えるのが妥当な気もするが、如何だろう。彼女の家族構成を、米谷君は知らなかったからね。ただ、本当の問題は、その第三者 エックス、としようか が米谷君の前で葛原美貴を装ったことだ」

「成る程。二つ目の場合、美貴さんが亡くなった後、米谷君が会っていたのがエックス、という訳ですね。でも、三つ目の場合、如何なるんです？」

三つ目の場合、米谷と逢瀬を重ねていたのは最初からエックス

ということになる。それは、入居していたのは葛原美貴ではなかった、ということでもある。

「つまり、遺影が美貴さんで、米谷君が美貴さんだと思い込んでいた人物がエックス、ということですね。ややこしいですが」

「そうなるね。入居手続きだけ本人が行い、後はエックスが住んでいた、ということだろう。その場合、エックスが葛原美貴を装っていたのも説明がつく。つまり、何らかの理由で、エックスは葛原美貴の部屋に葛原美貴として入居する必要があったのだろう。勿論、葛原美貴本人も承知の上で、だ。長々と説明したが、今までの推論は、あくまで全て机上の空論だ。実際は、全く違った筋書きなのかもしれない。とりあえず、私は明日、葛原美貴の下宿に行こうと思う。麻衣君、明日、大学は？」

「行きます。レポートは今日終わったんですが、明日から三日間集中講義が有るので。米谷君も履修してた、かな？」

「じゃあ、米谷君の様子を見ていてくれないか。彼の精神状態は今、おそらく非常に不安定だ。任せたよ」

「ええ。助手としての本領発揮でございますわ」

彼女がわざとらしく敬語を使う時は、少し怒っているか、少し照れている。

外は、すっかり暗くなっていた。

仮説（後書き）

投稿が遅れる予定でしたが、掲載しました。おそらく、今後は不定期更新になると思います。論理の破綻など、あるかもしれません
が、御承知下さいます様、よろしく願います。

8 / 2 4 守宮麻衣の台詞追加

8 / 2 5 「私」の台詞省略

不安

白鳥探偵社。

私の事務所の、名前である。

或る人は問う。中国の故事に倣っているのか、と。或る人は問う。「珍しいもの」という意味か、と。

しかし、事実は往々にして下らぬものである。

本来は私の名前である、白鳥探偵社、とするつもりだったのである。ところが、開業当時、事務所の扉にその号を記すため、適当な塗装業者に頼み、作業員達が帰ってから見てみると、どういつ訳か「鳥」から一本線が抜けて「烏」となっていたのである。業者に苦情を言わなかったのは、面倒だから、ということもあつたが、一番の理由は、これはこれで風情がある、と私が気に入ってしまったからである。今、私はまるで最初から「白鳥」であつたかのように振舞っているし、名刺にも、「白鳥探偵社社長」と刷っている。

その名刺を見て人は白鳥と勘違いするのだから皮肉なものである。埃塗れの窓を通り、鈍くなった陽光を受けて綺羅綺羅と輝く、事務所の扉に嵌め込まれた擦り硝子に、銀文字で刷られたこの偶然の産物を、私は何となく眺めていた。

今日は暑くなる、と朝の情報番組の天気予報士は言っていた。ならば、朝の涼しい内から調査に出るのが得策である、と珍しく朝早くから準備していたのである。

鍵を閉め、『出張中』の札を掛け、階段を下りる。

白鳥探偵社は、高層オフィスビルが所狭しと立ち並ぶビジネス街と、其処に通勤する労働者達の住む郊外の住宅街に挟まれて、多くの人だけが唯通過するだけの町に、忘れられた様に立つ古臭いビルの二階、その一室を借りて営んでいる。

ビルの前の並木道に立つと、容赦無く眩しい陽光が照付けてきた。暑くなる、じゃなくてももう暑いじゃないか、と心の中で天気予報士

に愚痴る。

向かうは葛原美貴の下宿。大家　米谷武の親に、会わなければならぬ。葛原美貴と米谷武の出会いこそ、店子と大家の子という関係が契機だが、米谷は普段独り暮らしで、依頼のことも親に話していないらしい。しかし、二ヶ月前の状況がほとんど何も解らない今、米谷の親に話を聞くことは依頼を解決するための必須条件である。

歩いて行こう、と思った。

歩けば小一時間はかかるだろう。探偵は足だ、という格言が有るかどうかは解らないが、有ってもこの状況で使うのは間違っている。無意味な労働を己に強いるのは、有るか無いか解らない様な格言を信奉しているからという訳ではなく、私の単なる癖なのである。

「探偵　で御座居ます」

「探偵　ですか。その、探偵様が、一体何の用でございますの」

女は口元だけで妖しく微笑んだ。成る程、青年の、あの妖艶なる笑みは母親譲りなのだろう。

米谷家の、玄関先である。

「単刀直入に申しませう。此方の御子息　武君に、ある依頼を受けまして、その事で御伺いに参りました」

「武が　。此処では何ですので、お上がり下さいませ。中で詳しく

お聞かせ願いませんか　と言って、女は奥に行ってしまった。

息子が如何わしい探偵などに、自分には内緒で依頼をしたと言うのに、微塵も動じない。生来そう言う性質なのか　気にはなったが、私も構わず、お邪魔します、と小声で言って靴を脱いだ。

カラン、と氷が音を立てる。

女 米谷夫人の出した冷えた麦茶は、真夏の太陽に絶えず睨ま
れながら歩いた後の渴いた躰からだに良く沁みた。

一気に飲み干す。

「実に美味い。生き返ります」

「只の麦茶でそんなに喜ばれますと、逆に恐縮してしまいますわ」

夫人は笑いながら、空いたグラスに次の麦茶を注ぐ。

「それで武は どのような依頼を？」

「尋ね人ですよ」

夫人は、へえ、と呟いて興味深げな顔をした。

「人探し ですね。誰かしら？」

「葛原美貴。御存知ですね？」

今度は眉を顰ひそめる。何だか所作の一つ一つが作り物染みている。

「勿論知っていますわ。美貴さんは、ほんの二ヶ月程前までこのア
パートの店子でしたもの。でも、彼女は亡くなったのではなくて？」

「そうです。申し訳無いが、その時のことについて、教えてくれま
せんか」

「さっぱり話が見えませんが、息子が困っている様だから協力

ふふ、この様な浮いた言葉は似合いませんか 手伝わせて頂

きますわ。少し、待って下さいね」

夫人はリビングから出ていき、暫くすると帳簿の様な物を持って
戻ってきた。

「美貴さんが亡くなった時、彼女のお母様が御挨拶に来られて。え
え、この様な寂れた小さなアパートでも、解約の時には色々と手続
きがあるものです。亡くなったと聞いた時には、流石に驚
きましたわ。あんなにお若いのに」

普通、知合いが亡くなって、流石に驚いた、という表現は些いさか淡
白に聞こえるが、この夫人が言うのと不自然さは無い。

米谷夫人は帳簿を捲る。

「それが、六月二十五日」

米谷武と葛原美貴の最後の逢瀬の、前日か。

否、これで米谷武が最後に会ったのが、葛原美貴では無いことが
確定になった。

彼女は既に、死んでいたのだ。言いようの無い不安が身体の中を
駆け巡る。

「どうしたのです？顔色が悪いわ」

「いえ、大丈夫です。この頃寝不足でして」

慌てて誤魔化す。このままでは私まで、頭が怪訝おかしくなっ
てしま
いそうである。

「それなら良いのですけど 探偵業と言うのは、不規則で大変そ
うですものね。お体を大事に」

「御心配は無用です。慣れてますから」

気丈に振舞う。これも私の悪い癖だ。

「ふふ、そうですね。それにしても、武は何を考えているのかしら。
一度だけ、買物の帰りに、美貴さんと近くの公園で親しそうに話し
ているのを見ましたけど。彼女を探して欲しい、と依頼したのでし
ょう？亡くなったことを知らないのでしょうか。可哀想に」

否、彼は知っている。だから、私は不安になるのだ。

しかし本当に目の前の女と米谷武は親子なのだろうか。どうも先
程から、他人行儀な語り口である。

「……葛原美貴が何故死んだか、御存知ですか？」

「自殺した、そうですね。何でも、実家の近くのマンションの屋上
から、飛び降りたとか」

自殺？

本当に、可哀想 夫人の寂しそうな声を、私は遠くに聞いた。

不安（後書き）

駄文ですが、お許し下さい。

再訪

「息子を、宜しくお願い致します。母親である私に相談もせず、探偵様に依頼したのは、何か事情があるのでしょうか。どうか、助けてやって下さいまし」

玄関先で、靴を履く私の背中にかげられた夫人の声は、何処か悲しげで、微かに震えていた。彼女も矢張り母親なのだ、と当たり前前の事を思う。自分の子供が、自らの抱える問題を、母親である己より先に何処の馬の骨とも知れぬ探偵に相談された事が悲しい、と言うより悔しいのだろう。それでも尚毅然としている。強い女性ひとだと思つた。靴を履き終わり、私は夫人に向き直る。

「私は、私の仕事には責任を持ちます。解決してみせましょう」

「ふふふ、頼もしいですね」

何か困つた事が起こりましたら、その時はご連絡致します、と云つて夫人は静かに扉を閉じた。

流石に帰り道まで歩くのは厭だつたので、駅に向かう。

途中で、電話をかけた。

事務所の扉に『出張中』の札は無かつた。

呼び鈴を鳴らしながら扉を開けると、丁度麻衣が米谷武に紅茶を振舞つてるところだつた。昨日の紅茶とは違つ香りで白い部屋が満たされている。少し甘つたるさが勝つている香りの所為で私は酩酊に近い状態に陥り、何処か外国のホテルに居るような気分になつた。

「あつ、お帰りなさい所長」

「良い香りだね。市販の紅茶じゃないな」

お客様ですから、と言つて麻衣は面白そうに私を見返した。

「夕子ゆうこのお土産です」

「君の友達の、半年に一度は外国に旅行しないと気が済まないと言

うあの少し変わっている子か。今度は何処に行ってきたんだ？」

「印度インドですって。何時もの様に一人で」

麻衣の高校時代の友達である朝霧夕子は、高校生の頃からバイトをして金を貯めては旅行している変わり者で、日本国内に留まらず南国にも何度も行っている所為か肌の色は褐色を通り越して赤黒く長く伸ばした黒髪をポニーテールにし、顔立ちも何処か外国人染みていて、おまけに何故か常時黒眼鏡サングラスをつけている女性である。大学には行かず、フリーターになってからは益々旅行好きに拍車が掛かったらしい。本人とは二、三度しか会ったことが無いのだが、麻衣の話には度々登場するし、彼女の旅行土産は麻衣を通して私も何度か貰ったことがある。事務所の呼び鈴も彼女が英吉利イギリスか何処かで買ったものである。

「本場の紅茶か。私も貰おうかな」

「ええ、夕子は時々少し怪しいお土産も持って帰ってきますから、先に私が毒味 御免なさい。味見しましたが、とつても美味しいですよ」

美味しそうに紅茶を飲んでいた米谷は、怪……しいお土産、と聞いた途端飲むのを止めて紅茶をまじまじと凝視したが、少し迷った拳句また飲み始めた。

麻衣は台所へ消え、私は青年の向かいに座った。

「昨日の今日で突然呼び出してすまないね」
「構いません」

呼ばれるだろうと思っていました、と何かを決意したように米谷は言った。

意外だった。

「そうか。君から受けた依頼について、少し再確認したいことがある。勝手だが」

私の考えていることを言って良いかな、と問う。

青年は静かに首肯うなずいた。

私は胸ポケットから写真を出し、机テーブルに置いて、昨日とは逆の方向

に写真を滑らせた。

「これは、遺影だろう？君は葛原美貴が失踪した後、おそらく偶然彼女の葬儀に出席してこの写真を撮った。そして、その葬儀で彼女の死んだ日時を知ったんじゃないか？自分達が最後に逢ったより前の日だと。君は混乱しただろうね。死んだ後の彼女と逢いました、なんて、警察に相談する訳にもいかず、二ヶ月もの間迷って結局、麻衣君を通して探偵の私に尋ね人を依頼した」

「そ　そうです」

そうです、その通りです、と何か抜け落ちたように青年は繰り返した。先程まで昨日と打って変わった様に毅然としていたが、それは強がりであったのか。矢張り青年は何処か壊れかけているのだ、と私は茫然ほんやりと思っただ。

「僕はある日彼女と逢いました。彼女と話しました。でも彼女は、美貴さんは、その時にはもう死んでいたんです！頭が怪訝おかしくなったのか、あの時の美貴さんは幻だったのか、見てはいけないモノを見てしまったのかと思いましたが！確かにあの日の彼女はいつもの彼女じゃなかった。何処かそわそわしてたし、ちよつとした表情や仕草もいつもと違った！その時は、僕に別れを告げるから、だから変だったんだと思いました。でも、もしかしたら美貴さんはあの時」

「待ちなさい」

私は、その先を話してしまうと青年が何か大事なものを失ってしまふような予感がして、話を止めた。

青年はカップの中に少しだけ残っている紅い液体を見つめて、ただ震えていた。

麻衣が台所から戻り、私の前に紅茶を置いた。

「どつぞ」

「有り難う」

机を回り込むと米谷のカップにも新しい紅茶を注ぐ。

「有り難う……」

「何で同級なのに敬語なのよ。取り敢えず、落ち着いたら？」

麻衣が微笑みかけると、米谷は少し笑った。

これだけ取り乱して尚、青年の笑みは妖しさを醸し出していた。

「君と葛原美貴が最後に逢った日　六月二十六日のことを詳しく話してくれないか」

米谷は紅茶を飲んで落ち着いたのか、静かに、訥々とつとつと語り始めた。

「あの日　」

再訪（後書き）

駄文ですが、お許し下さい。

9 / 28 ルビ修正

回想

あの日。

六月二十六日。

今度は彼処あそこの神社にいらしてください。

籠かごの歪よこんだ自転車を走らせながら、僕は彼女の声を、果敢はかな無く、何故かどうしようもなく不安定に感じるその音色を、頭の中で何度も反芻はんじゆした。

彼女と最初に会ったのは何時いつだろう。

ふと考える。

その契機きっかけこそ彼女が自分の両親の店子だったことなのだが、その事実じじつに気付いたのは知り合った後の様な気がする。もしそうであるなら、自分と彼女に他の接点などある筈はずもなく、親しくなることとはない筈はずなのだが、今まで何故かそうしたことを余り意識することなく、彼女と逢瀬ほうぜんを重ねていた。最初の頃は、僕の中で彼女との逢瀬ほうぜんは非日常的なイベントであったし、その頃ならば、彼女と出会った契機きっかけも覚えていたのかもしれない。

日常、否、習慣。最早そのイベントは習慣になっている。契機きっかけを忘れたのはそのことが原因なのだろうか。しばらく頭の中で自問した。しかしはつきりとした答えはついに見つからなかった。

今日聞いてみるのもいいかもしれない。彼女は変な顔をするだろうが。

僕たちは何で出逢ったのでしょうか。

何故、何時いつ、何処どこで、どのように。

彼女に真面目な顔でそれを言う己を想起して、僕は笑ってしまった。

可笑おかしいじゃないか。まるで恋愛小説おひなみたいだ。

神社に着いたので、自転車を降り、手で押しながら不自然に紅く染められた鳥居とりいを潜くる。鳥居の上には近所の子供が乗せたのだろう

小石が幾つか見えた。

奥に見える拝殿へ真っ直ぐ伸びる歩道に沿うようにして木々が鬱蒼と繁り、境内全体を覆っている。その所為だろう、初夏の夕方だと言つのに、両隣の住宅に比べて神社の内だけ異様に昏い。

敷石の並べられた道を進む。昏いせいで拝殿の輪郭がぼやけて、何時もよりも大きく見えた。

急に恐怖を感じた。思わず立ち止まり、拝殿から目を逸らしたが、そうしていたのは一瞬だった。もう闇を怖がる年齢ではないな、と思ひ直し、馬鹿馬鹿しくなって少し自分を笑った。

拝殿の横に自転車を止めて、引き返し歩道の中程、その左脇に設けられた、境内の雰囲気から明らかに浮いている木製の長椅子に座り彼女を待つ。長椅子の横には電燈があるが、まだ点いていなかった。

約束の時間の三十分後に彼女は来た。

「遅れて御免なさい」

長椅子の横まで来て彼女は少し頭を下げた。長い黒髪がさらさらと揺れる。白いワンピースがとても良く似合っていた。

「少し講義が長引いてしまつて。自分の専攻に關係している講義だから途中で抜ける事も出来なかつたの」

「大丈夫です。院の研究は大変なんでしょう？」

「ええ。とても大変」

そう言いながら彼女は横に座つた。心臓が一拍だけとくん、高鳴る。電燈が点いていない所為で、彼女まで暗闇に紛れている。薄気魅悪い拝殿とは違い、むしろそのことが彼女の儚さを際立たせ、彼女は今にも消えてしまふさうだった。

聞いてしまおうか。彼女が消えない内に。

「美貴さん、あの」

「何？」

「僕達は、その、何で出会つたのでしょうか？」

「え？」

「変な事を訊いて済みません。でも、どうしても思い出せないのです。何故、何が契機で僕達はこうして逢うようになったのでしょうか？否、御免なさい。非常識ですよねこんなことを訊くなんて」
彼女は訝しげな表情をこちらに向けているのだらう。見なくても解る。

如何して訊いてしまったのだらう。

思わず謝ったが、一度出した言葉はもう戻らない。怒るだらうか、それとも呆れて帰ってしまうだらうか。

「そんなことは そんなことは、別に如何でもいいことじゃないかしら」

返ってきたのは予想外の答えだった。

「如何でもいいこと、ですか」

「そう。出会った契機を忘れてしまっても、現にこうして度々逢つてるでしょう？それで充分じゃない。人は自分が何時立って歩けるようになったか、覚えていないけど、それでもこうして歩いていく。何故かと言って、それが当たり前だからよ。それと同じこと」
「そんな ものでしょうか」

当たり前だから、忘れる。自転車を漕ぎながら考えていたことと似ている。確かに、答えは出さなくていいのかもしれない。逢っているだけで充分なのは僕も同じなのだから。そんなことを熟々考えているうちに、彼女は突然吹き出した。

「なんちゃって。少し気取ってみただけど、正直に言うと、私も今いち覚えてないの。だからお互い様。それに、例えも変よね。人が自分の歩き始めた時期を覚えていないのは、単に幼いからだもの」

自嘲気味に話す彼女の声は矢張り何処か不安定だった。

暗いね、電燈は点かないのかしら、と彼女は言う。

そうですね、と馬鹿の様に答える。

「今日は、大切な話があるの」

急に声の調子が変わった。重く、冷たく、それでいて何時もより幽かに。その変わりようが、僕にとっても不吉な予感を齎した。

「大切な話？」

「そう。とても大切」

「何です？」

「遠くに行かなければならない」

「な」

彼女の言葉の意味を理解できなかった。

「遠くに、行かなければならないのよ。引越すの。だから、貴方とはもう会えない」

「と、遠くって。あ、会えない？」

俄かに錯乱した。上手く言葉が出てこない。彼女は何を言っているのか。

「大学院も辞めるわ。今まで、話し相手になつてくれて有り難う」

「そんないきなり……」

僕が必死に理解しようとしている間に、彼女は独白を始めた。

「今になって思うのだけれど、不思議な関係だったよね、私達。一週間に一度は逢っているのに、付き合っているわけでもないしさ。友達でもなくて、恋人でもないけど、友達以上恋人未満、なんて良く言うような間柄でもない。友達と呼べる程会ってないし、恋人よりも多くのことを語り合っただし。突詰めてみれば人なんて皆そういう曖昧な関係なのかもしれないね。でも、そういう関係に人は皆名前を付けて、それで釣合いをとっているんだよ。友達とか恋人とか、家族とか。他人っていう言葉だって、関係が無い、ってことを示す立派な名前じゃない？でも私達の関係って何なんだろうね。名前をつけることができる？瑣末な事かもしれないけど、やっぱり名前が無いと、いずれ釣合いが取れなくなる時が来るんじゃないかしら。今がその時なんだよ、きつと」

恋人より多くのことを語り合っただけが妙に耳に残った。彼女の独白の中で、その言葉

本当にそうなのだろうか。僕は、彼女のことをどれ程知っているというのか。それにしても、彼女はこんなに理屈屋だっただろうか。

次々と疑問が頭に浮かんで消えていく。一つだけ解った事は、彼女がもう僕と逢うことを望んでいないということだった。

「御免ね。突然決まったことだから」

突然決まったこと。

「何故、引越すんです」

「理由は言えない」

そう言っただけで彼女は立ち上がった。彼女の四肢は夕闇に融けて、辛うじて白いワンピースと、夕闇よりも濃い黒髪だけが風に靡いて揺れているのが解った。

消えてしまう。

「ちよ、ちよっと待って下さいよ。遠いところに行っただって、逢いに行くことはできません。せめて、何処に行くのかくらい教えて下さい」

彼女は僕に背中を向けて、少し首を傾げた。

「天国、とか」

「じよ、冗談は止めて下さいー！」

冗談の様な言葉とは裏腹に、彼女の口調は無性に悲しげだった。

御免ね、と彼女は繰り返す言う。

「二度と逢えないくらい遠いところ、って意味よ。多分もう、生きて逢うことはないと思って。今日だって、無理をして逢いに来たのよ。私は、私は本当ならもう」

「そんな」

然様なら。

彼女は鳥居に向かって歩き出した。

消えていく。

四肢の先から胴体に、すうっと闇が侵食する。闇と対極の存在である筈の純白のワンピースも、闇より濃くその存在を示していた筈の黒髪も、絶対的な闇に沈んでいく。

やがて葛原美貴は、丁度鳥居の辺りで、完全に融けた。

消えそうだった彼女は、本当に消えてしまった。

神社だけでなく、街全体に夜の帳とほが降りて、忘れていたことを思い出したかのように電燈が点くまで、僕はただ呆けたように茫然と
していた。

日常が、とても大切な日常の一部が欠けてしまった。
遠いところ。二度と逢えない。

天国。

風が吹いて、境内の木々が一斉にざわめいた。

怖い。独りは厭だ。

僕は急いで神社から離れた。

回想（後書き）

せ。
次回の投稿まで、少し時間がかかります。気長にお待ち下さいませ。

解決（前書き）

サブタイトルを「解決」としてはいますが、完結ではございません。
紛らわしいですが、ご了承ください。

解決

温ぬるくなつた紅茶を一口飲む。

「成る程。天国、ね」

青年から反応は返つてこない。見ると、過去の情景にすっかり浸つてしまつている。

「すつと、消えたんです。嗚呼、怖かつた」

「米谷君。その時の状況は良く解つた。葬儀に出た時のことを話してくれないか」

「すつと え？あ、ご、御免なさい。葬儀ですね、葬儀」

相当動揺したのか、残つた紅茶を一気に呷あおつて青年は咽むせた。

「す、すいません。……出席したのは偶然なんです。と言うより、葬儀を見つけたと言つた方が正しいかもしれません。僕は美貴さんの実家を知らなかつたし ええ、知らなかつたんです。あの、彼女と最後に逢つた日の、翌日のことでした」

米谷は前日のシヨックから立ち直れず、大学を休んで、目的も無く町を徘徊していたらしい。精神的に相当追い詰められていたんだろう。その時、不意に線香の匂いが鼻を掠かすめたという。

「しばらく歩くと、読経の声も聞こえてきました。別に誘われたわけではないんですけど、気がつくとき大きな家 日本家屋と言つのでしょうか の門の前に立つてました。すると、葛原、という表札の横に、『故葛原美貴様葬儀式場』と大きな文字で書かれた看板があったんです。一瞬だけ、昨日別れてから交通事故にでも遭つたのだらうかと考えましたが、それでも信じられませんでした。どうしても自分の目で確かめずには居られなくなり、急いで家に帰つて一度しか着たことのない喪服を引っ張り出して、もう一度戻つたのです」

参列者に混じつて門の中に入ったはいいものの、受付に行くのは抵抗があつたらしい。その場で逡巡していると、葬儀を抜けて庭で話し込んでいる喪服の婦人達の声が耳に届いたそうである。

何故葬儀が遅れたのかしら？美貴さんが亡くなったのは五日前でしよう。

そう。私にも良く解らないのだけど、何でも検死と言うの？それに時間がかかったとか……。でも、彼女は飛び降り自殺でしょう？変だわね。

五日前。

「もう訳が解らなくなりました。とりあえず、羞恥心と言いますか、そういうものを捨てて、というより無くなってしまって、受付で記帳しました。香典なんか用意してなかったので受付の人は明らかに怪訝な顔をしてましたが、気にする余裕も無かったです。写真は、焼香の時にこっそり写メを撮りました。不謹慎にも程がありますよね。でも僕の中では彼女はまだ生きていたんです。だから、その時はあまり罪悪感も感じなくて……」

「まあ不謹慎やら罪悪感やらはこの際置いておこう。君も混乱しただろうから。それで、そのまま帰ったのか？」

「ええ」

「そうか。葛原家の住所は解るかい？」

米谷は携帯を取り出した。住所を携帯に記録していたらしい。

「有り難う。他に何か話していないことは？」

「いいえ。これが、二ヶ月前僕の体験した全てです。隠していませんでした」

「最初から話してくれるに越したことはなかったが、まあいいでしょう。それで、君はどうする？」

「どうするって……」

「私は探偵だ。君の依頼は、葛原美貴を探してほしい、だろうか？その依頼を解決することが私の仕事だ。そして、私の答えはこうだ。葛原美貴はすでに亡くなっている」

「ちよつと、所長」

麻衣が非難の目を向けてきた。米谷は蒼い顔をしている。構わず私は続けた。

「依頼は解決した。報酬を貰おうと思う」

所長　と今度はもう少し強めの口調で麻衣は言った。

「では、米谷君が六月二十六日に逢ったのは、誰なんです！彼の話によれば、美貴さんは二十二日に亡くなっているんですよ！」

「その日の出来事は全て米谷君の妄想だ」

「そんな……」

米谷は二人の喧騒をよそにずっと黙っていたが、やがて口を開いた。

「……依頼を変更します。いや、追加でも構いません。追加分の依頼料も支払います。それでいいですか？」

「いいでしょう。依頼は？」

「僕が　六月二十六日に逢った女性を探してください」

「了解しました。依頼変更、ということにしておきましょう。料金は最初に言った通り、一律十万円だ。おそらく次に君を呼び出すのは、依頼を解決した時だろう」

「期待しています。では、僕はこれで」

紅茶、御馳走様でした。

青年は麻衣に礼を述べながら事務所を出ていき、麻衣は青年を追って外まで見送りに行った。

応接席から窓際のデスクに戻り、お気に入りの肘掛け椅子に座りながら考え込んでいると、五分程して麻衣が戻ってきた。

明らかに怒っている。

「何のつもりです？」

「……何が？」

「先程の答えは解決と言えるのですか！米谷君の中ではまだ何にも解決していないんですよ！」

「彼の心中と、我々が受けた依頼内容は、別にして考えなければいけないよ」

「それはそうですが」

さらに反論しようとする彼女を止めて、私は言った。

「彼の為でもあるんだ」

「は？」

「はつきりと葛原美貴は死んでいるということを彼に言っただけでいいと、彼はいつまでも葛原美貴の幻影に追われることになるんじゃないか。それより、紅茶が欲しいな」

麻衣はまだ納得していない様子だったが、それにしても言い方というものが、とか何とか言いながら渋谷台所に向かった。

窓の方に椅子ごと体を向けると、外はもう暗く、ビルの隙間から見える空には二つ三つ星も瞬またたいている。今晚の夕飯はコンビニ弁当になりそうだな などと思いつつ、ほんの一瞬、夕闇に浮かぶ神社を幻視した。

「辞めると言うのに、何故遅れたのかな」

私が呟くと、麻衣は足を止めて怪訝そうに振り向いた。

「何か言いました？」

「いや、何でもない」

しばらくすると、お客様が帰ったから市販の紅茶です、と多少棘とげのある声が台所から聞こえてきた。

私は肘掛け椅子に身体を預け、一つ溜息を吐いた。

解決（後書き）

駄文ですが、お許し下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0122w/>

境界

2011年9月29日03時27分発行